

KUNITAGCHI BAROQUE ENSEMBLE

くにたちバロックアンサンブル
第2回演奏会

A. ヴィヴァルディ

4声のソナタ 変ホ長調 RV130 「聖墓にて」

弦楽のための協奏曲 イ長調 RV159

G. サンマルティーニ

リコーダー協奏曲 ヘ長調

G. ムファット

「調和の捧げもの」よりソナタ第5番 ト長調

2005年6月4日(土)

13:30開場 14:00開演 入場無料

国分寺市立いずみホール

<http://homepage2.nifty.com/shige-kun/kbe/>

くにたちバロックアンサンブル第2回演奏会によろこそおいで下さいました。

初めての自主演奏会から一年、この演奏会に向けた準備の中で、バロック音楽にまた新たな魅力を発見し、その演奏に更なる喜びを感じてまいりました。今日の演奏会ではその感動を皆様と分かち合えるよう努めたいと思います。拙い演奏ですが、最後までお聞きいただければ幸いに存じます。ごゆっくりお楽しみ下さい。

曲目紹介

A. ヴィヴァルディ Antonio Vivaldi (1678-1741)

4声のソナタ「聖墓にて」 変ホ長調 RV130 1. Largo Molto 2. Allegro ma poco

協奏曲 イ長調 RV159 1. Allegro 2. Adagio 3. Allegro

さて、まずバロック音楽を代表する作曲家ヴィヴァルディの2曲です。ヴィヴァルディは非常に多くの作品を残していますが、似た曲が多いとして「ヴィヴァルディは協奏曲を四百曲書いたのではない、同じ協奏曲を四百回書いたのだ」と揶揄されます。しかし、今日演奏する2曲を聴けば、ヴィヴァルディが極めて異なるスタイルを使い分け、かつ非常に緻密な音楽を書くことのできる作曲家であったことが、おわかりいただけると思います。

4声のソナタ「聖墓にて」は、キリストが埋葬された墓所を指すタイトルからして、教会で演奏されたものと考えられ、合唱曲のように、各パートがそれぞれ対等に旋律を受け持つ対位法のスタイルで書かれています。第1楽章は同音反復と下降音形からなる主題が低音から次第に導入され、神秘的に盛り上がっていき、クライマックスで第1ヴァイオリンと全合奏が歌い交わした後、次第に収束していきませんが、宙ぶらりんな和音で終わり、第2楽章のフーガにつながります。フーガでは主題は反対に第1ヴァイオリンから、応答を伴って導入されますが、2つの主題と2つの応答が駆使される、たいへん緻密に構成された曲です。よく聴くと、これらの主題や応答の様々な音形が第1楽章のモチーフから派生しており、曲全体が一つの主題に貫かれていることに気づきます。

次の「協奏曲」は対象的に、きわめて単純明快な音楽です。第1楽章では2つのヴァイオリン・パートがユニゾン(同音)でなめらかな旋律を奏で続け、他パートは和声的な伴奏に徹します。短い緩徐楽章を挟んで、第3楽章は躍動的な3拍子です。イ短調でソロの激しい掛け合いに始まり、突然雷が落ちるかのようにイ長調の下降音形が全合奏で挿入されます。その後も短調のソロと長調の全合奏が目まぐるしく入れ替わります。

G. サンマルティーニ Giuseppe Sammartini (1693-1750)

リコーダー協奏曲 ヘ長調 1. Allegro 2. (速度指定なし) 3. Allegro assai

ジュゼッペ・サンマルティーニはミラノに生まれ、33歳の時にロンドンに渡り、ヘンドルのオペラ楽団等でオーボエ奏者として活躍しました。生涯ミラノに留まった5歳年下の弟ジョバンニ・バッティスタは3楽章の「シンフォニア」を多く残し、古典派の交響曲への道を切り開く上で大きな役割を果たしましたが、兄の方はより保守的な作風の音楽を残しています。今日演奏するソプラノ・リコーダーのための協奏曲もバロック音楽の語法の範囲で書かれています。ヴィヴァルディの協奏曲などと比べると独奏と全合奏の掛け合いが複雑に作られており、また流麗で息の長い旋律や、特に緩徐楽章での和声の移ろいが非常に美しい曲です。

G. ムファット Georg Muffat (1653-1704)

「調和の捧げもの」よりソナタ第5番 ト長調

1. Allemanda 2. Adagio 3. Fuga 4. Adagio 5. Passagaglia, Grave

ムファットは今日演奏する中で最も早く生まれた作曲家で、南ドイツで活躍しましたが、パリ、ウィーン、ローマ等に学び、フランスのリュリ、イタリアのコレッリと、後期バロックの音楽様式を確立した2大作曲家から直接の影響を受け、当時最新のフランス様式とイタリア様式をドイツに紹介しました。ムファットが書き残したこれらの曲の演奏法についての解説は、当時の演奏習慣を知る上で非常に重要な情報源となっています。

「調和の捧げもの」は1682年、ムファットがイタリアからザルツブルクに戻ってまもなく出版したイタリア風の協奏曲集で、17世紀の音楽らしいおおらかな響きが魅力的です。今日演奏するソナタ5番は、第3楽章のフーガを除き遅い楽章が続く特異な構成を取りますが、圧巻は終楽章の「グラヴェ(重々しく)」と指定された長大なパッサカリアです。パッサカリアはスペイン起源の変奏曲の様式で、ゆったりと重々しい3拍子で、一定の和声進行を繰り返しながら様々な変奏を繰り返すものです。似た様式に「シャコンヌ」がありますが、この両者の違いは必ずしも明確ではなく、バロック時代にすでに用語の混乱が見られます。ちなみにバッハは無伴奏ヴァイオリンのための「シャコンヌ」とオルガンのための「パッサカリア」を作曲しています。ムファットのパッサカリアは主題の和声進行を延々と繰り返しつつ、独奏と合奏の交代や音域やリズムの変化などにより、万華鏡のように様々な姿を見せ、時には力強く、時にはやさしく、また弾けるような楽しさも、うめくような苦しさも含めて推移していきます。それはあたかも人間の営みを高みから見下ろすような、あるいは人の一生を振り返るような感興を呼び起こします。パッサカリアやシャコンヌがしばしばオペラにおいて終曲として用いられたのもうなずけます。

コラム: バロック音楽の楽しみ方

【通奏低音の話】

アンサンブルの中のチェロ、コントラバス、チェンバロ等のグループは、実は「通奏低音」(バツコ・コンティヌオ)と呼ばれる、一つのパートです。通奏低音はバロック音楽を特徴付ける技法ですが、それは作曲の技法であると同時に演奏の技法でもあります。

作曲法としての通奏低音は、低音とその上に積み上げられる和声の動きが音楽全体を支配するという考えからです。逆に、その上に乗る旋律は、その和声の動きの枠内に留まる限り自由です。実際バッハの作品と伝えられる曲に、同じ通奏低音の旋律の上に異なる上声部がつけられた曲がありますが、これはバッハの息子か弟子が作曲の練習をした結果と考えられています。またバロック時代には、通奏低音が繰り返す一定の和声進行の上で上声部が様々な変奏を繰り返す変奏曲が多く作曲されました。今日演奏するムファットのソナタ第5番の終楽章「パッサカリア」もそのような変奏曲の一つです。

演奏法としての通奏低音は、低音の旋律をチェロやコントラバスといった低音旋律楽器で演奏するだけでなく、チェンバロやオルガンといった鍵盤楽器や、リュートやギターなどの撥弦楽器が加えられることが特徴です。これらの楽器は二つの機能を担っています。一つは和音を奏でて響きを充実させ、また和声の動きを示すことによって音楽の大枠をつくることです。もう一つは弓奏弦楽器や管楽器の滑らかな響きとは異質な「はじく」音でリズムを際立たせることです。

このような機能を持つ通奏低音ですが、作曲家が書き残したのは低音の旋律と、それに書き添えられた、どのような和音に乗るかを示す数字だけです。このため通奏低音を弾くチェンバロ奏者は、左手で楽譜に書かれた低音のパートを弾き、右手は曲に合わせて即興的に演奏することが求められます(現代の演奏者にはこれは難しいので、右手のパートを書き起したのも使われます)。また楽器も曲の特性に合わせて自由に選べます。今日の演奏会では一般的なチェンバロとオルガンに加えて、アンサンブル初の試みとして、ヴィヴァルディの協奏曲で小型のギターを使用してみました。

実は、バロック音楽では、このような即興性が求められるのは通奏低音奏者だけではありません。旋律を奏でるヴァイオリンやフルートといった楽器も、楽譜に書かれたとおりに演奏するだけでなく、演奏者がその技術とセンスを発揮して即興や装飾を加えることが期待されます。それはちょうどジャズ奏者がスタンダードナンバーのメロディを様々なアレンジして演奏するのに似ています。その時の通奏低音はジャズで言うところのリズムセクション(ベース、ドラム、ピアノ)と同じ役割を果たしているのです。このジャズにも似た自由度の高さが、バロック音楽の魅力であり、それを可能にしているのが、通奏低音という音楽技法なのです。

くにたちバロックアンサンブル

くにたちバロックアンサンブルは、1992年に「くにたち市民オーケストラ」のメンバーを中心に、バロック音楽愛好家が集まって結成されたアマチュアの弦楽アンサンブルです。これまでにアルビノーニ、ジェミニアーニ、ヴィヴァルディのようなイタリア物のほか、J.S.バッハ、ヘンデル、テレマンといったドイツ系の作品を手がけてきました。

昨年初めての自主演奏会を開き、活動にはいよいよ弾みがついています。BGM風の明るく軽快な感じに留まることなく、「語り」の効いた彫りの深い演奏を目標に練習を重ねています。

古楽の素朴な響き・旋律の美しさに魅せられながら、アンサンブルの楽しさを追求する団体、それが「くにたちバロックアンサンブル」です。

くにたちバロックアンサンブル ホームページ <http://homepage2.nifty.com/shige-kun/kbe/>

